

明日にいかす エピソード検討会にしよう

大倉 得史 京都大学大学院教授

今回参加のプロジェクトメンバー

- 池添 鉄平 (たかつかさ保育園)
 - 木村 登世子 (清風幼稚園・青風和泉幼稚園)
 - 村山 里奈 (京都市立中京もえぎ幼稚園)
 - 北川 智美 (京都市立錦林小学校)
 - 津田 要 (京都市久世保育所*)
- *令和2年度所属、現在第二児童福祉センター

1. 第5期研究プロジェクトのメンバーによる報告

第5期研究プロジェクトでは『私たちが大切にしたい心の育ちとは何か～語り合いから始めよう～』をテーマに、幼稚園、保育園(所)、小学校の先生方が集まり、約2年間研究を続けてきました。

はじめは「心の育ちとは何だろう?」と、目に見えない『心の育ち』を研究することへの不安があったメンバーの先生方が、プロジェクトを通してこの見えない『心の育ち』が何となく感じられたような気がする」と報告されています。エピソードを書き、それを検討することで子どもの『心の育ち』を追い求めていくのですが、それぞれが「この研究で変わったのは、自分の心持ちだ」「一番の成果は自分自身の変化だ」と語っておられます。

エピソード検討会を通して、様々な意見を聞き、多面的に子どもを捉えることで、子どもへの理解が深まり、関わり方が今までと違ってくることを経験されたのです。エピソード検討会を通して、子どもとの日常の一場面を皆で共有しながら思いを巡らせることで、より肯定的に子どもを捉え、思いに寄り添った関わりが出来ると報告されています。

2. アドバイザー大倉得史京都大学大学院教授による講義

省察(保育を振り返るひととき)は、保育・教育実践の不可欠な一部です。エピソードを書くこと、そしてそれを複数名で検討することは、省察を促し、深い洞察につながります。また、2者間での話し合いに比べ、複数名だと緊張がなく穏やかな感情で話し合えます。みんなで話し合うことでチームとして子どもに関わることができ、その質が向上します。一つのエピソードによって、違う保育者と子どもとの一場面を追体験したり、他者の意見によって「なるほど」「そんな考えもあるな」と自分自身の保育観や子どもの見方が変わることもあります。

エピソードを書くことが、様々なことに意識を向け、より子どもに寄り添う意識の高い保育・教育の実践へとつながります。

力の育成が強調される現代社会ですが、そこに重きを置くと心は育ちません。『心の育ち＝主体性の育ち』は目に見えにくく、一人一人違う個別で具体的なものなのです。「私が私であって良いんだ(私は私)」とありのままを認められ、安心安全が保障されることで「誰かと～したい」という心(私は私たち)が発生し、子ども自身が持つ本来の力が育っていくのです。

『心の育ち』は感じるほかありません。エピソード検討会をすることで想像力を鍛え、明日への子ども理解、寄り添いにつなげていきましょう。